

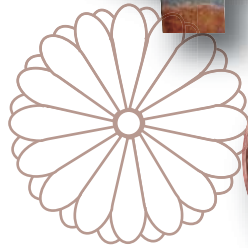
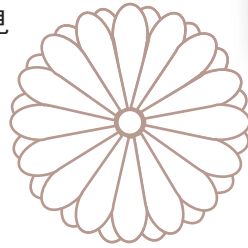
長年にわたり、平家の落人や安徳天皇陵墓について研究されている小松さんにお話をお伺いすると、「高板山に安徳天皇の陵墓だけがあるというのはおかしいが、周辺には平家にまつわる伝説が残っており、その遺跡もある」と切り出し、安徳天皇や平家の落人に関する資料を見せてくれました。福山神社での調査にも立会い、現場を見たという物部町野竹出身の小松さんは「福山神社の鏡はレプリカで、このレプリカを作る際に、お家騒動があったと聞いている」と家伝を話してくれました。



まさてる
小松正景さん（香北町永野）

かんざし

安徳天皇が屋島で母から渡されたといわれる金銀製のかんざし。大きい方は御所車に菊葉を添えたもので、小さい方は葉菊と竹の葉をあしらったもの。このかんざしは、安徳天皇陵墓上に墓印として置かれておりと伝承されており、高板山から見つかっている。



福山神社の鏡

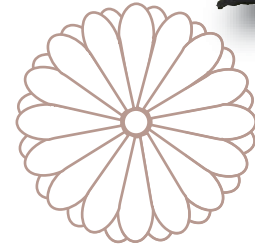
福山神社（物部町野竹）にある天皇家の紋章付き鏡（写真上）。貴金属製で直径約15cm。この福山神社は平維盛が祀られており、地元では、ご神体は石であると信じられてきた。しかし、安徳天皇一行の子孫による伝承では、福山神社に安徳天皇ゆかりの品があるといわれており、調べてみるとこの2枚の鏡が出てきて、地元の立会人もおどろいたという。

安徳天皇ゆかりの品々

「安徳天皇は壇ノ浦に行つていなかっただけで、崩御された」と伝えられ、近年になり、古文書に書かれていたりといわれる品々が発見されている。はじめ天皇ゆかりといわれる品々が発見されている。

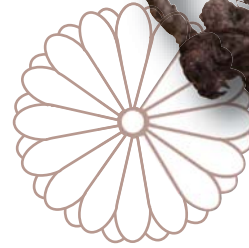
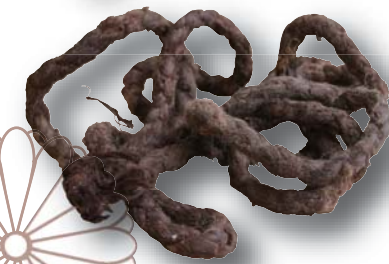
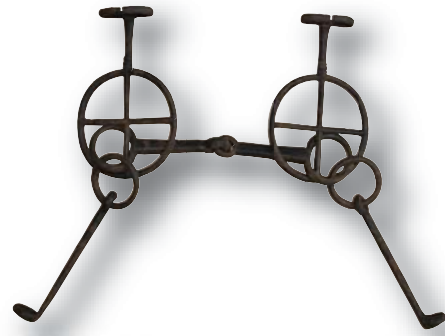
おんぞ 御衣

安徳天皇が普段着として着ていたと伝えられている夏用の御衣。麻でできており、葉菊紋が入っている。下の写真は背面から撮影したもの。安丸家所有。



くつわ 轡と手綱

安徳天皇の愛馬に使われていたといわれる轡と手綱。安丸家所有。安徳天皇一行は倒れた愛馬の皮をはぎとって埋め、馬皮神社として祀ったという。餓死寸前だった一行は馬の肉を食し、安徳天皇はその愛馬を「我々の命の駒である」といわれ、この轡と手綱を最後まで手放さなかったといわれている。この馬皮神社は祖谷伝説でも、馬岡神社として伝わっている。



香美市物部町には安徳天皇をはじめ、平家一門の数々の伝承が残されている。物部町黒代（安丸家の古文書（現在焼失）には次のように書かれていたと伝えられている。源義経軍の奇襲により惨敗を喫した平家は讃岐屋島の飯宮に御幸していた安徳天皇を避難させることとなる。屋島には後に壇ノ浦の海に沈む影人天皇（天皇の身代わり）が残される。天皇一行は海路淡路を経て阿波の地に入り、山御所と呼ばれた屋島本陣の後背地である山中に潜幸する。安徳天皇は生母である建礼門院とひと時を過ごすため、屋島の本陣へ向かう。母との久々の再会に天皇とはいえ、幼い安徳天皇はひとときもその傍を離れず、幸せな時を過ごしていたという。しかしそれもつかの間。義経軍が屋島本陣を指し間近に迫っているという知らせが再び母子を引き裂くこととなる。建礼門院は身に付けた髪飾りを「これを母と思いなさい」と形見に渡し、天皇一行は遍路姿に変装し、慌ただしく屋島を後にする。この後一行は阿波の山中深く分け入り、一時潜幸するも厳しい寒さに耐えかねて下山することになり、七つの剣を奉納した。これが剣山の名の由来である。その後、徳島祖谷の古味や栗枝戸に一時飯宮を置いた。しかし、この地も安住の地とはならず、さらに天皇一行は祖谷より土佐に入り、西熊から笹を経て葦生郷の高板山赤牛に至り飯宮を営み、しばしの平安を得た。深山幽谷にあつて、母の居る都に思いをめぐらす日々のうちについては十分なる。山中にあつては十分な薬膏を施すこともままならず、無念にも10歳で崩御された。玉体は高板山赤牛に設けた殯宮（飯御所）近くに手厚く葬られた。供の武將らは、その陵を御殯大明神として祀り、周辺の神池・楮佐古・安丸、または峠を越えた祖谷の地などに陵を囲むように隠棲し、遠くから拜んだ。また慰霊の場を設け、代々山を守り、菩提を弔い続けた。